

河川の蟹が座敷へ上がって来るので、不思議に思っていましたら、じいさんが言うには、「それは、必ず大水が出る前兆だぞ。」ということでした。まさにその通りになり、そういう伝説や言伝えなどは無視できないと感じました。

そして、午後3時頃に、天竜川の堤防が、堤防(防空壕)を掘った形のとおりですとんと陥没しました。堤防の上は人や車が通れるようになっていましたが、切れた瞬間、その現場を見たのは私以外に、2人か3人位しかいなかったと思います。

想像してください。堤防は約15メートル位の高さになっており、長さ約30メートルくらいの堤防の防空壕がすたとんと落ちた場合に、目一杯の水位の洪水がどのような流れ方なのか。想像できないかと思いますが、私はよく磯部茂栄さんのお宅を「西、西(のお宅)」と呼んでいたのですが、そのお宅に立派な石蔵がありました。その石蔵に直接濁流がぶつかり。滝を逆さにしたような勢いです。あのような立派な石蔵が、1分もたずに跡形もなく無くなりました。そのくらい洪水の力というのは恐ろしいものだと痛感しました。そして間もなく切れた堤防がだんだんと侵食され、100メートルから150メートル位の幅までに侵食されました。

濁流がどんどんと地域に流れ込んだわけですが、私の家も午後6時頃だと思いますが、暗くて見えませんでした、大きな音をたてて流されました。幸いなことには、家の家族は堤防に近



かったので、家族4人逃げることで、人災は全くありませんでした。常総市鬼怒川の決壊をテレビでよく見ましたが、当時を思い出しても見ることが本当につらくてできませんでした。なんてひどい水害、経験をしたものだと当時を思い出しました。そんなことから、昔でいう金折は瞬間にして水浸しとなり、磯部さんの家族の方も大勢亡くなりました。そして瞬く間に昔でいう芳川村、河輪村、五島村は完全に水浸しになってしまいました。

天竜川西派川の堤防

決壊の原因となった防空壕が掘られたのは、遠州灘は遠浅で敵軍上陸があるという話から、沿岸警備と本土決戦をするために防空壕が必要だと。天竜川の堤防に約1個小隊分、25、6人が生活できるような防空壕を掘ったわけです。高さが3メートル位、幅もそのくらいあり、間口は長方形で入口、出口も掘られ、長さは約30メートル位ありました。その堤防の切り口が洪水によりどんどん南側へ侵食された

ものですから、私の家も流されてしまい、着の身着のままで逃げました。できなかったことですが、もしあれ(防空壕)が埋まっていればどうなったのかなと後で思いました。終戦と同時に当時の兵隊達はすぐに故郷に帰ってしまい、防空壕として堤防の中が空洞のまま水害を迎えてしまったわけです。ですから、洪水の浸透圧で水がチョロチョロと堤防の内側に漏れていたのです。畳や松の枝を持っていったぐらいでは追いつかない状態で、それでも水防団や近所の皆さんが集まって「どうしよう、こうしよう」というような相談をされていましたが、間に合うような状況ではありませんでした。

ありがたい隣人からの援助

私も当時11歳でしたから、食べ盛りで、腹が減ってきて何も無い事がわかっていましたから、両親に「腹がへった」ということが言えませんでした。仕方なくただ1人の姉に「腹がへったよ」というと、返ってくる言葉は、「我慢しなさい」、それだけでした。腹

本稿は平成28年1月16日に金原明善生家記念館で開催された証言伝承会を紙面再現したものです。

がへって仕方がないと困っていましたが、午後8時頃、私の家からは150メートルくらい南の小島八重吉さんのお宅からおにぎりを頂きました。そのお宅でも水がついたはずですが、その時のおにぎりの味はおいしく、本当にうれしかったです。今でも忘れられません。そしてお腹が膨れたのですが、その晩に寝る場所がありません。困ってしましたら、更に小島さんのお宅から、わざわざ一番大切な座敷を空けていただき、私たち4人を泊めていただきました。それもたった1晩だけではなく、私達が今の飯田へ移り落ち着くまでの間の20から25日くらいは面倒を見ていただきました。このことは本当に感謝し、忘れられない恩義を感じています。今でも(小島さんのお宅)の前を通るたびに子供に「このお宅でお世話になった。今あるのはそのおかげだぞ、忘れるなよ。」と言い伝えています。

決死の救助

当時の人助けのはなしです。夜12時を過ぎたところで、私の親父や小島さんが「3人で助けに行くぞ」と言いだし、私の親父も小島さんもそれぞれ舟を持っていたのですが、私の家の舟はすでに流されてしまい、小島さんの舟で行くことになりました。もともと米屋で、米を運ぶのに舟を使っていたので、うちの親父は舟を漕ぐのが上手で、夜に相談を3人がしているのを私のお袋が聞きつけて、「あんたら死んじゃうよ。どうしても行くの。」というようなことを言っていました。それでも舟で出かけ、何人かの方を助けることができ、親父達はずいぶんと勇気があることをしたなど、当時密かに思いました。しかし、口の悪い人達は、「自分の家が流されたのに、人を助けに行ったよ。」と笑う方もいて、私はその話を聞いて非常に悔しい思いをした経験もありました。

当時、私の家にはお米をついた石臼が6つ、7つあったはずなのですが、後にたまたま1つ掘り出されて、今でも庭に置いてありますが、これも私自身の体験を忘れないように戒めにもなっています。そして、これだけ豊かな世の中になりましたが、昔はよく言った、「向こう三軒両隣」とか、「遠い親戚よりも近くの隣」という言葉が死語になりつつある最近を非常に残念に思います。このような体験談は、子供たちに言い聞かせており、私自身も現在、南区の区役所の仕事のお手伝いをしたり、地元のボランティアのお手伝いをしたりして、当時の地域の恩義を忘れないように、恩返しをするつもりで、後僅かな人生を勤めている状態です。簡単ではございますが以上、私の経験をお話ししました。



被災写真を元に描かれた水彩画